

## 尾崎喜八の詩による男声合唱曲

この分冊は尾崎喜八の詩に男声合唱曲として作曲された詩と楽譜を収録しています。

それらは現時点で男声合唱組曲として7組曲で、各組曲で選ばれた詩は合計38詩になります。それらすべてを作曲したのが作曲家多田武彦氏です。

男声合唱を楽しんでいる者にとって尾崎喜八を知るようになったのは多田武彦氏が尾崎喜八の詩を選んだことにつきます。聞くとところによると最初に選んだ詩は「かけす」だそうです。

そこで取上げられた詩を作曲した多田武彦氏の紹介をすることにします。

出版されている音楽家辞典で紹介されているものと、多田武彦氏を京都大学時代から良くご存知の増田博氏の紹介文を掲載させていただき、作曲家多田武彦氏を知っていただくことにします。

最初に、日本の作曲家「近現代音楽人名辞典」（日外アソシエーツ発行）に掲載されている紹介文を、その後に増田博氏の紹介文を掲載します。

### 多田 武彦 ただ・たけひこ 作曲家

[生] 1930年（昭和5年）11月22日

[出生地] 大阪府大阪市南区（中央区）

[学歴] 京都大学法学部（旧制）〔1953年〕卒

[代表作] 「多田武彦男声合唱組曲集1～8」（音楽之友社）

「多田武彦混声合唱組曲集1～3」（音楽之友社）

「多田武彦男声合唱組曲24作品」（メロス楽譜）

祖父は創業期の松竹の役員で、初孫の武彦にも将来この仕事を継がせようと、小学校時代から武彦に歌舞伎・演劇・映画・邦楽などの動態芸術を見聞させた。戦後“将来はミュージカルや映画の監督になりたい”と考え、独学で和声学・楽式論など西洋音楽の作曲に必要な勉強を始めた。やがて、西洋音楽の構築性の原型とも言うべき“四部合唱”の名曲を徹底分析することが肝要と思い、旧制大阪高校や京都大学では合唱団に所属した。1953年（昭和28年）大学卒業時は厳しい就職難時代で、両親の勧めもあり、富士銀行（現・みずほ FG）に就職。同期生には“名門出身の俊秀や体力十分の酒豪が多い”ことに驚き、すべてに劣性を感じるが、関西商法の格言の一つである“他人のせんこと、せなあかん⇒他人がやりたがらないことを実行しなければ駄目だ！”を信じて、“業績不振の融資先の再建”に注力。特に、父の知己を介して“経営の神様といわれた松下幸之助や、再建王といわれた早川種三”からの秘伝を基礎に“人員整理を伴わない再建手法”を編み出し、多くの会社の再建に奏功した。一方、作曲では“日曜作曲家”に徹し、作曲家山田耕筰・清水脩の薫陶に従い、西洋音楽の6割を占める構築性（リズム・メロディー・和声学・楽式論）について、また残りの4割を占める装飾性（デュナーミク・アゴーギク・コロリート・フレージング）について、名作曲家の名作を、各楽器別に徹底分析した。更に、これらの8項目の妙技を駆使して、日本の名詩の中から“春夏秋冬・花鳥風月・喜怒哀楽・起承転結”の優れたものを選び作曲を続けた。この結果55年間に500曲以上の作品を発表、その中の多くは永年にわたり愛唱され続けている。また、ここ10年程の間には、特に欧州系一流交響楽団の指揮者や団員から学んだ“アンサンブル確立の為の効率的練習技法”を携え、日本全国を廻って指導を行ったり、“話し方・カラオケ上達法”についての“多田メソッド”を用いて、講習会を開催している。

## 多田さんについて

多田さんは、昭和 5 年（1930 年）大阪生れ。大阪府立今宮中学校（旧制）、大阪高等学校（旧制）を経て、昭和 28 年 3 月に京都大学法学部（旧制）を卒業された。

卒業と同時に富士銀行に入学し、各地の支店長、芙蓉グループ会社その他関連企業の役員などの要職を歴任された後、一時病を得られ、快癒後は同行で後進の指導に当たっておられる。

多田さんは 15 歳中学 3 年の頃に作曲を始められたとのことである。それは多田さんの古い日記によれば、昭和 21 年 3 月 13 日早朝、一面に靄のたちこめる琵琶湖畔において「日本の伝統的な綾織の上にこうした幻想的な美しさがかもしだされるような音楽を心から書いてみたい、という希望が湧きあがってきた」ときからである。その後、中学 4 年を修了して大阪高等学校へ入学されてから、独学で作曲の勉強に取り組まれた。

当時の旧制度下では、中学校は 5 年制であるが、4 年修了時点で高等学校の受験がみとめられ、相応の人達がそれに挑戦したものである。多田さんは、その 4 修入学組の一人である。大阪高等学校入学後の状況を多田さんは次のようにいわれている。

「運よく 4 年修了で高等学校へ入学できたものの、中学 5 年を卒業して入学して来た同級生との学力差は蔽うべくもなく、私にとって苦しい日が続いた。その頃、万葉集で著名な国文学担当の犬養孝先生(現大阪大学名誉教授、甲南女子大学教授)に、『君は作曲の勉強を始めているらしいから、その方も積極的にやってみては...』と励まされ、いくつかの書物を読むことを勧められた。その中に『中原中也詩集』があったが、少なくともその頃の私が中也の詩を読んで元気を取り戻したことは事実である。そして昭和 25 年京都大学へ入学してから中也の詩のいくつかを独唱曲として作曲し始めた。」

多田さんは、ここでおっしゃっているように、京大時代、中也の詩の中から「早春の風」「閑寂」「また来ん春」「北の海」「汚れっちまった悲しみに」「雲雀」「六月の雨」「月の光」「冬の日の記憶」「冬の長門峡」などを独唱曲として作曲されたが、後年これらの曲がもとになって男声合唱組曲「在りし日の歌」（昭和 34 年）、「中原中也の詩から」（昭和 42 年）、「冬の日の記憶」（昭和 52 年）が作曲され世に出た。

多田さんは、大阪高等学校入学後、同校合唱部に入部されたが、これが男声合唱に深くかかわることになる第一歩となったのである。合唱部の 1 年先輩に現在東京混声合唱団常任指揮者の田中信昭氏がおられ、共に活躍された。余談ながら、田中氏はこの後東京芸大へ進まれる。

一方、多田さんは昭和 25 年 4 月京都大学法学部へ入学、同時に京都大学合唱団へ入団された。当会の長老・青木信美氏は、多田さんと一緒に京大男声合唱団で歌っていた唯一の団員だが、青木氏はこの頃のエピソードを次のように語る。

「多田氏が入団した夏、比叡山で合宿したところ、偶々ジェーン台風が来て正指揮者が入山できなかつたので、急遽多田氏が指揮をすることになった。一風変わった多田氏の指揮を上級生の幹部たちが認め、秋の合唱コンクールの 2 週間前に多田氏を正指揮者に立てた。このとき京大男声は、関西合唱コンクールで初めて 3 位入賞を果たした。余勢をかって、翌年も多田氏の指揮で 2 位に入賞した。

丁度その頃、大阪・朝日会館で清水脩作品発表会が開催されることになったのを聞きこんで、無謀にも私と高橋一成君(現ナガサキヤ会長)が、『この発表会の前座に、京大男声の‘月光とピエ

ロ'を演奏させていただきたい』と折衝した。清水脩先生はこれを快諾。発表会の後で、清水先生から、当夜の演奏の中では京大の‘ピエロ’が一番良かった、とほめられる演奏をしたのであった。」

これを機に多田さんは作曲家清水脩氏の知遇を得るところとなり、その後合唱曲の作曲に関して数多くの貴重な助言や教示を受けられた。

多田さんが京大男声の指揮者として活躍されたこの時期、関西の大学合唱界は、福永陽一郎氏の表現によれば目立って大きな才能を何人が保有していた。朝日放送で音楽関係を中心としたジャーナリズムで活躍されている全日本合唱連盟副理事長の日下部吉彦氏、大和銀行合唱団を日本一の職場合唱団に育て上げ今もその高い水準を維持されている大阪府合唱連盟理事長の松浦周吉氏は、多田きんの一学年上の同世代指揮者であるが、当時「松浦の関学グリー、日下部の同志社グリー、多田の京大男声」は日本全国のトップに位置する高い水準でしのぎを競ったものである。

京大卒業後の昭和 28 年、全日本合唱コンクール課題曲に応募した「柳河」が佳作に入選、これに「紺屋のおろく」「かきつばた」「梅雨の晴れ間」を加えて男声合唱組曲『柳河風俗詩』とし、29 年暮、京大男声が初演した。これが多田さんの男声合唱組曲の第一作である。この組曲は一世を風靡し、現在に至るも人気が高く、多田さんの代表作の一つとして愛唱されていることはよく人の知るところである。

その後多田さんは多忙な銀行家としての生活の中で、現在までに 84 の男声合唱組曲、11 の混声合唱組曲（男声組曲を混声化したもの 3 を含む）をはじめ、多数の作品を発表されている。

この間、昭和 38 年度芸術祭には混声合唱組曲「京都」をもってNHKから参加し、奨励賞を受賞されている。

この他、京大時代から黒人霊歌、日本民謡、ポピュラーソングなどの編曲を数多く手がけられ、男声合唱の機能を知り尽くした人の手になったその編曲の美しさと歌い易さは群を抜いている。

銀行家としてだけでも平均以上に多忙な多田さんが、これだけ沢山の作品を、そして駄作の全くない力作揃いの作品をどのようにして創り出されたかは、我々常人の到底想像の及ばぬところである。ただ、現実には少ない時間を効率よくお使いになるためであろう、通勤電車の混雑の中で曲のスケッチを行い、ビルの廊下を往き来しながらスケッチしたメロディーを口ずさみ、各パートを自ら唱ってみられるとのこと、こうして歌手の側にたった作品が生れるのである。多田さんのアタッシュケースの中に、書物や書類にまじってスケッチ用の五線紙などが入れられているのを青い城（広友会の練習後の歓談の店）などで見かけたメンネルコール広友会のメンバーも多いと思う。

## 多田合唱組曲と「詩」

多田さんの「詩の選択のたしかさ」はつとに有名である。「組曲をつくる場合、楽式やモチーフに適した詩を選ばなければならない。これを忘れて、いい詩だから、という動機だけで作曲すると、かなりの有名作曲家でも失敗する。」との清水脩先生の教を頑なに守っているということであるが、それ以前に多田さんに天性備わった詩に対する感覚の素晴らしさ、すぐれた鑑賞眼、選択眼のしからしむところであろう。加えて、いい加減なところで妥協せず、何事にも徹底するという多田さんの態度はここにも表れていて、市販本や身の回りで入手できる範囲の書物からの選択ではなく、例えば東京・駒場の日本近代文学館を訪れ、構想した詩人の資料を丹念に調べる、という手続きを踏まれているのである。

多田さんの作風と相俟って、多田作品にはどのような詩人の詩が多くとりあげられているかは興味をひくところであるが、いま試みに、84 作に及ぶ男声合唱組曲についてみると次のようになっている。

(1)北原白秋	16	(7)丸山薫	5
(2)草野心平	8	(8)伊藤整	4
(3)尾崎喜八	7	(9)中勘助	3
(3)三好達治	7 (未初演 1)	(9)堀口大学	3
(3)中原中也	7 (未初演 1)	(9)大木惇夫	3
(6)立原道造	6 (未初演 1)		

このほか、大手拓次、木下杢太郎、田中冬二、津村信夫、百田宗治、八木重吉、山村暮鳥、室生犀星、山崎澗朗、伊藤静雄などがとりあげられている。

多田さんがとりあげている詩は、白秋の詩のように歌謡性に富んでいて、それ自身メロディックなものも勿論あるが、一見メロディーに乗せにくいような自由詩あるいは散文そのものが非常に多い。しかし、そこに共通しているのは、それらの詩を口に出して読んだとき、極めて音楽性に富んでいることである。多田さんの作品は、詩のもつ音楽を巧みに引き出しておられることが、また一つの大きな特色であろう。

詩のこころ、言葉のひびきを美しいメロディーで伝えられる多田作品が、広く長く愛唱されるゆえんである。

## 多田さんと詩人尾崎喜八

多田さんは昭和 46 年に作曲してから約 2 年間作曲を休まれている。そして、次に筆をとられたのが、組曲「尾崎喜八の詩から」であった（昭和 50 年、関西学院グリークラブが初演）。

多田さんは、この組曲に寄せて次のように述べておられる。

「西欧の古典音楽にも極めて造詣の深かった詩人尾崎喜八の詩は、『自然と心から詩を歌い出すことそれが詩人尾崎喜八の全生命である』といわれるほど素朴で、人間的である。自由詩特有の作曲上の難度が見られたが、じっくり取り組んで行くと、そこには『そのまま音楽になっても不思議ではない構成力』と『暖かい人間性と自然への素朴な讃歌』があった。」

そして多田さんは、この組曲を作曲するにあたり、北鎌倉に尾崎先生の奥様を訪問し（この時すでに尾崎先生は亡くなられた後だった）、詩の成り立ちなどについて尋ねるなどされている。このことも多田さんの作曲態度の特色の一つである。この他、例えばまだ多田さんが合唱作品を世に送り出しはじめて間もない若いころ、中勘助の詩に作曲するに際して、中勘助詩人を訪問されている。この時、大きく年齢差の違う二人の間に気持や感覚の通じあうものがあったそうである。草野心平詩人についても同様であったと思われる。尾崎詩による第二作は、「尾崎喜八の詩から・第二」である。この男声合唱組曲は、「坂田真理子先生の神奈川大学フロイデコール常任指揮者就任三十周年」を記念して神奈川大学フロイデコールの委嘱により、昭和 61 年 7 月に作曲されたものである。

そして、「縦の樹の歌」は尾崎詩による第三作であり、平成元年 5 月 5 日に完成し、私達に届けられたのである。詩の選択に当たって多田さんは、社会経験や合唱経験の長い人の多いメンネルコール広友会の特質を勘案され、尾崎喜八先生の詩を選ばれた、とお聞きしている。

去る6月、メンネルコール広友会有志4名が多田さんのご案内とご紹介によって、北鎌倉の尾崎先生宅を訪れた。このとき聞かせていただいたコンパクトディスク「音楽への愛と感謝」の中で、“The wind from the west”というアイルランド民謡を尾崎詩人ご自身が歌唱されているが、多田さんは早速わが広友会のためにこの曲を男声合唱用に編曲してくださった。

### おわりに

銀行家としてのお仕事の上でも、音楽の世界でも、そして他の広い分野でもすぐれた才能と大きな能力をもっておられる多田さんについて、ほんの一面を語ることにすら私には難しい。しかも、その「ほんの一面」が正しい実像として伝えられるのかどうか、はなはだ心許ないことであった。しかし、あえてメンネルコール広友会の記念保存版楽譜「樅の樹の歌」刊行にあたり、非礼を顧みずこの一文を書かせていただいた。

私達は多田さんのご健康を心からお祈りし、今後も続々といい作品を書かれることを期待したいと思います。

《メンネルコール広友会 委嘱曲完成記念出版『樅の樹の歌』の増田博氏寄稿より》抜粋

1989年10月10日・発行